

# 農民文学研究

—「食しき人々の群」—「彌宜様宮田」

(宮本百合子)を中心に—

## 山 崎 広 美

### 1 状況の認識

#### (4) 自然観から

十八才の少女の百合子は祖母の家で夏休みを過すたびに、田舎の野山の美しき、空の青さに心ひかれ、この美しい自然を相手に暮している農民たちがどんな生活をしているか興味をもったのではないかと思えます。それを百合子は「食しき人々の群」の新さんや「彌宜様宮田」の宮田やお六を通して表現しました。「食しき人々の群」も「彌宜様宮田」も半分以上が自然描写です。しかも、長塚節の『土』、本庄陸男の『石狩川』と、ほとんど

それが觀念にとどまっているきらいがあるのではないかと思えます。

知恵も知識もない子供のような人間、他の子供たちから相手にされないで、自然を相手に遊ぶ人間を描き、また、彼等が、いかにみごとに人間から自然から裏切られていくかの過程を克明に描いています。百合子は美しい自然を肯定しながらそこでの人間の醜さを知らされ、大きな失望を覚えると共に理想的農民像はやはり美しい自然にマッチした人間でなければならぬと考えていたようです。だから自然の中で悲惨な生活をしている農民は百合子にとっては何とかしなければならなかったのです。しかも自分自身の手によって何とかしようというのです。それ故、自然を自分の願いからつきはなして『土』や『南小泉村』に見える自然描写はできなかったのです。たえず希望的に自然へ目を向けていました。宮田の夢は野山に行って大自然の中で空想にふけることです。つまり、自然が唯一の頼りとなっているわけです。宮田の空想の世界はとりもおさず、百合子の出発点であり、解決点につながるものであると思えます。それ故、百合子は自然の美しさをかくも大胆に叫んだのだといえましょう。そして農

対照的な自然の美しき、明るさの描写ばかりです。これは自然への、つまりあるがまゝの姿への百合子の信仰と憧がれによるものだと思います。それに反して農民生活の描写は暗いじめ々としたものです。では何故自然描写は明るいのでしょうか。しかし百合子は自然の怖しさを見がしているのではあります。自然の猛威を写實的に描いています。しかし、こゝには『土』のような、どうしようもない自然の単調さや『石狩川』のような自然の無情さの表現は少しもうかがえません。自然現象と農民生活のからみ合いの捉え方が不十分だからではないかと思えます。暴風の荒れ狂った後に死骸が見つかったり、収穫時の農民のはれやかな姿と田園風景の豊さの描写にはかなりの緊密な関係があるのですが、

民のみじめな生活を必ず自然と同じような美しさ、明るさをもったものにしてようと努力するわけです。

(四) 時代背景から

宮本願治は「軍國的、半封建的日本軍国主義も、この時期に急速にさまざまな矛盾を暴露しつゝあった。こうした時代にまだ社会主義を知りえない、ごく年若い人道主義的インテリゲンチヤの摸索と探求の道程の反映であった」▲「宮本百合子の世界」「貧しき人々の発足」▽と評しています。

熱心にトルストイの作品を研究していた百合子は当時の文壇をよそに、素朴ながらも正統なトルストイアンなる人物にならざるをえなかったのです。

百合子は、甚助の子供たちの碧の奪い合いのような、一見瑣事にすぎないことからでも、「非常な興味」を起させられたのです。そうすればそうするほど、百合子の心の中には当低うわすべりの宗教観や、あいまいな情りが入ってくる余地がなかったのです。百合子の若い目は、現実の状況を見定めることと、その解決策を考えなくてはならなかったのです。

## 2 農民観

『貧しき人々の群』と『福宜様宮田』における百合子の農民観を、田山花袋の『重右衛門の最後』真山青果の『南小泉村』との、それぞれの農民観を比較しながら述べてみたいと思います。

花袋が捉えた長野県の農村はまことに平和な村でした。この平和な村に、己が本能のまま生きた一人の男、重右衛門が現われ、その平和な村をあらしまわります。そうして花袋はこの男がその平和を荒すのだといっています。彼が死んでしまえば同じような平和な村にかえるというのです。そこで花袋はこの重右衛門の生き方を「人間は完全に自然を發展すれば、必ずその最後は悲劇に終る」(田山花袋集『重右衛門の最後』P2)と考えます。

『重右衛門の最後』は、その平和な村の表面的自然描写から出発して、自然児として生きた人間から得た教訓めいたことばで終わっています。花袋の描く農民生活は結局、美しい自然の中で、平和な生活を営んでいる人間ということになります。重右衛門のような自然児が現われ、ときたま、その平和がぶっこわされることはあっても『自然はやはり自然に帰る』というのです。このような花袋の平面的

農民観に比べて、わずか十八才の百合子は、「明治初年に私共の祖父が自分の半生を擲けて、開墾したこの新開地は諸国からの移住民で、一村を作られたのである。南の者も、北の者も、新しく開けた土地といふ名に誘惑されて幸福を夢想しながら、故国を去って集ってきた。けれどもこゝでも哀れな彼等は成功できないばかりか、前よりも、ひどい苦勞をしなければならなくなっても、その時は、もう年をとりよそに移る勇氣も失せて仕方なし町の小作の一生を終るのである。それ故彼らは今も昔も貧しい。」(宮本百合子全集第一巻「貧しき人々の群」P11)というように、広い歴史的全体的見地に立って、農民を見つめています。

また、真山青果の農民観は『南小泉村』の冒頭にはっきりと次のように表現されています。「百姓ほどみじめなものはない。」(真山青果集『南小泉村』冒頭)と。「醜い醜い、百姓の生涯はその醜い生涯だ」(真山青果集『南小泉村』)と農民の生活をきめつけてしまっています。青果は主観的感情で農民を設定してしまっているのです。

田山も真山も、それぞれ自然主義作家でありながら、一方はロマンティックに一方は主

観的リアリズムの立場で農民像を設定して  
ます。それ故、これらには生きて動いている  
農民像というものが稀薄です。百合子の農民  
像はやゝ観念的なきらいは、免かれませんが、  
「子供たちは地主の食膳を肥やすために  
育てられているようなものである」(宮本百  
合子全集第一巻「貧しき人々の群」P23)とい  
うように、歴史的社会的にとらえている点  
は、彼ら二人の自然主義作家よりも、大きな  
進歩をとげているように思います。しかしこ  
のような見地からの農民像のとらえかたも数  
々の問題点があります。

百合子にとっては農民の生活は逆回転する  
畜車の中の生活であります。みず／＼しい  
可能性をもった次の時代の担手である子供で  
すら、親からも、社会からも裏切られ、結局は  
同じような小作人となり、親たちと同じみじ  
めな生活を受けつがねばならないわけです。  
こゝに百合子の限界があったのではないかと  
思います。現実認識も『素朴な自然主義の  
域』を脱しえないで、『事実認識』にとどま  
ったきらいがあります。百合子の眼前にあ  
る農民生活を描いたまゝにとどまっているわ  
けです。何故、彼らはそんなに貧しいか、はわ  
ずかに、地主の怖しさをいじけた子供の姿か

ら主人公が想像している形で描かれているだ  
けです。百合子は、自分の手でこういう農民  
の生活を改善しようとするのです。だから、  
百合子は、『どうぞ、それまで待つておく  
れ』と呼ばねばなりません。

『福宜様富田』にも同じことがいえます。  
百合子の目的は、現実を逃避する富田が、ま  
た、現実にしがみつく海老屋の御隠居からし  
か写らないのです。

結局、百合子は、農民は自分自身の生活を  
どのようにも改善しえないものとしてみてい  
ます。

### 3 思想と方法

百合子の窮極の思想は『貧しき人々の群』  
の中にみられる。お天道様々にシンボライズ  
されているのではないかと思います。々真当  
な何かを支えにして、絶対に正しいもの、  
よいものを認め、それを信仰にまで高めよう  
とした百合子の姿勢は、後のマルクス主義信  
仰へと発展していったのではないかと思いま  
す。次に、『貧しき人々の群』は一見して分  
るように、農民の生活の場と主人公の生活の  
場がかつきり距離をおいて描かれています。  
これを私は二重構造と呼びたいと思います。  
だから、作者の態度は、真山青果の『南小泉

村』や、田山花袋の『重右衛門の最後』のよ  
うに形式的には傍観的態度といえ、しかも、  
それは『南小泉村』に比べて、肯定的傍観的  
態度といえ、『重右衛門の最後』に比べて、  
積極的傍観的態度といえます。

私はこの作品を読みながら、百合子の人間  
愛、思想的目醒めに、心うたれながらも、ど  
こか抵抗を感じずにはおかないものがありま  
した。それは、とりもなおさず百合子のエリ  
ート意識に他ならないと思います。百合子  
は、確かに農民に対していろいろ反省し、同  
情しています。しかし百合子自身は一だん上  
の立場で見守っているにすぎないのです。い  
つも自分は指導者の立場で、いつも自分は正  
しいことを認識しているという、こういう態  
度は、百合子の『生れ』からくるブルジョワ  
氣質ではないかと思えます。また一つには、  
百合子の思想のあいまいさに起因すると思  
います。『私とお前たちが微笑み合ふこと』を  
希望しながらも、主人公は、はっきりと自分の  
世界と農民の世界とに、一線を引いていま  
す。これらの矛盾は、百合子の思想と姿勢か  
ら必然的に生ずるものであります。

『福宜様富田』においては『土』と同様

に、農民の立場に立って描いています。より農民に密着した姿で描いており、作者の観念も希望も、みな彌宜様宮田に投影されています。それ故、二重構造のそらん／＼しさはうかがえません。これは『岸から竹竿を延してゐるもの』の立場から『溺れるもの』の立場へと前進を示しているものといえます。百合子の若さのせいか、主観的ロマンチズムに陥っている嫌いはありますが、抵抗なく読者の心の中に入っていく、小説的手法からいえばまともまっているといえます。

また『貧しき人々の群』での私と甚助、新さんと母親、『彌宜様宮田』での、宮田と海老屋の御隠居、をそれ／＼、前者を善人、後者を悪人と簡単に分けてしまいます。『彌宜様宮田』では、こういう百合子の観念からきりとられた枠内で宮田とお石が鬼婆の海老屋に、くいものにされ、生活を破壊される過程を描いています。

百合子の農民の生活の中へ一歩踏みこんだ姿勢は、うかがえますが、その中の百合子の思想は現実を逃避した、宮田の心中での声に生かされるだけなのです。宮田をして土地所有に素朴な疑問をうち出しているにもかゝらず、それはっきりした解決法はみられ

ません。

方法においては一歩農民に近づいて描いているにもかゝらず、思想的にいえば、『貧しき人々の群』から一歩も進歩してないと思えます。

完